

# 女子教育論の必要性

大塚節治

まず女性をも含めて人間としてのあるいは日本人としての教育が問題となる。これは今日、文部省が教育審議会などを設け、その意見を徴しまたその途の専門家や評論家の間においていろいろと論ぜられているところである。殊に最近は「期待される人間像」につき中央教育審議会専門委員による案が発表され、論評の俎上にのせられた。

教育の問題の中心がその目標たる期待される人間像であることは首肯されるが、それは将来の社会における一員としての人間の姿であり、また将来の社会を形成してゆく人間である筈であるから、その問題自体が将来の社会像を前提とすることとなる。更に将来の社会は科学技術の進歩によりいかような姿になるかほぼ想像がつくとしても社会の理想像はなるままに委せておくことはできず、望まじき社会を目標とせねばなるまい。ところでかかる社会は歴史発展を

導く理念を離れては考え得られないであろう。それは唯物史観にせよ理想主義的世界観にせよ一つの歴史哲学を前提とすることになる。かようにして教育の目的は結局一つの歴史観ないしは世界観にまで溯らねば十分に確立されないのではあるまいか。

更にその実現の手段となる教育の場がまた多くの問題を含んでいる。社会や家庭を別にし、教育当面の場たる学校だけについても、六・三・三・四の制度問題を始め、小・中・高校・大学とそれぞれの問題をもち、大学は特に多くの問題を抱えている。これに加え教育技術の問題も重要な問題であろう。

女子教育も男女共通な教育一般論を離れて単独には考えられない。そこで女子教育論の第一の問題は一般教育論である。そうしてそれはまた沢山の問題を含んでいることは上に指摘した通りである。

ところでここに女子教育論というのは女子特有の教育あるいは女子教育に特有な問題をさすものと理解される。しかるにその問題にはいる前にかかる特殊な問題または領域があるかが問われる。それは一つには男女共学論から向けられる設問であり、二は男女平等論からくる問題であり、三には科学の進歩による性別無意味化の傾向からくる問題、四には将来の社会像の変革からくる疑問である。これらは理論的には女子教育論の先決問題である。

一、小学から大学に至るまで男女共学が行なわれて今日、女子だけの女子教育というものは必要がないという理論は一応成立つてあろう。これに対する確な反論が要求される。

二、男女平等論から教育の機会均等は今日の常識である。憲法第二六条や教育基本法第三条を参照するまでもあるまい。

教育上の男女平等論は一般論としては何人も異論はないと思うが、どこまでそれを推進してゆくべきか、また行き得るかは、問題となる。権利の問題と事実の問題とは区別されねばならない。女性にして一国の君主となることは歴史上その例は珍しくない。現に英國の国王は女王である。また最近は女性にして一国の総理大臣となっている人もある。婦人代議士はありふれたこととなった。政治家のみならず医師、弁護士、会社重役、公務員、一般サラリマン等々男子の独占を許さず、漸次に女子の進出するところとなっている。機械が発達して体力の使用が減少するにつれてその操縦者のなかに女性が進入することは自然の勢いである。女性の仕事は只に

サシスセソ(裁縫、修理、炊事、洗濯、掃除)から  
カキケケ(家計、教育、工夫、健康、交際)に移るだけでなく

(註一) 凡ゆる職業に拡大される。逆に男子も従来女性が担当していた職業あるいは女性にふさわしいと思える職業に進出することが考えられる。それは唯に料理、裁縫、炊事、整髪、美容のみならず看病や育児等へも進出するのではないか。スポーツにおいても乗馬や射撃は己に男子の独占ではなく、遠くから女性の野球選手をみるに至るであろう。

男女平等論の立場からすれば人間形成としての教養に男女の別を除き得るのみならず、専門の知識や技術の教授、真理の探求としての教育においても男女の能力に本質的な差がない限り平等教育は無制限に推進され得る。こうなると喫煙や飲酒などの嗜好が接近するだけでなく、言語動作、服装に至るまで両性が接近して中性的人間が多くできることも想像される。自然が与えた性的区別の堤防を科学文明の進歩と社会主義の徹底化の波がどこまで押しつぶすであろうか。

三、数、物、工学及び技術の進歩による宇宙開発、人工頭脳、電子計算機等の発明に伴う社会の変革に加えて、生化学や医学の発達に伴う性別の破壊が問題となる。人工受精のごときが性に関する従来の考え方を破壊し、その結果、将来いかなる社会が作り出されるか想像を絶するものがある。人々は優良なる子供を得るために優良なる種を人工的に受胎せしめることができる。あるいは政治家、あるいは学者、あるいは実業家、あるいは芸術家等々自から好むところの優良なる種を人工的に受胎せしめることが日常のこととなれば、それに応じてそれらの種を用意する銀行ができるであろう。これは同時にまた親不明の子供のふえることを意味する。そうしてかかる子

供は戸主の遺産を相続する権利があるかどうかという法律上の問題が起る。このような問題は已に米国において起っているようである。更に母体を離れて試験管のなかで人工的に人間が培養されることも実験された(註二)。このようにして性本来の役目が減少されると、性別教育の意味もまた減少するであろう。このような研究、実験の結果、人間の人工培養が普及したとすれば、親子関係の変化から人間の道徳觀念に大きな変化を来たすことが想像される。現在の問題はこのような研究を放任すべきか、統制すべきかというにある。研究を教育の一部とすればこれは一般的な社会問題たるのみならず教育論の重要問題となる。殊に女性自然の性能を大半無用となし、人間を、魚類や畜類と同様に扱ふこととなるから女子教育論にとつては無視できない問題といえよう。

四、科学の進歩に伴う社会像の変化は前段の例にも示されているが、将来の社会像の変革に大きな関係をもつと思えるいま一つの例を指摘したい。それはLSD運動である。これは元ハーバード大学心理学教授であつたテモテ・リアリ(Timothy Reary)から始まつた社会現象である(註三)。紙面の關係を詳細を省略するが、このように科学的研究、発見の進歩は将来の社会像、人間像に大きな影響を与えることが予想されるゆゑにその利害得失に関する批判的研究が必要となる。将来の価値観が変化するとせば現在のそれをもつて批判することは無駄であるとも思えるが、それは哲学の問題となり、結局先きにも述べたように世界観にまで追いやられる。そんなわけで女子教育論は、将来の社会における女性像の問題として一般教育論の場合と同様に将来の社会像の問題が提起される。これを要

するに女性だけのいわゆる女子教育を確立するためには一つには其学論からくる設問、二つには男女平等論から生ずる反論、三には科学・医学等の進歩から生ずる男女平等化に対する批判、四には将来の社会像の変化との關係などについての十分な研究と用意が望まれる。これが女子教育論第二の問題である。

### 三

さて以上女子教育の前提となる基本問題とその特有教育に対する設問を指摘したのであるが、ここに一言その必要性について卑近なことを述べて、その内容の問題に移ることとする。

将来いかに女性が男性化するかは別として、現在では大多数の女性性は家庭の仕事を担当し、職業婦人は男子に比して極めて少い。もとより、職業婦人は年々増加する。従つて専門職業に向う女性のため用意をすることが必要であると共に、家庭婦人のために必要なる教養は女子教育において依然として重要な部分を占めるのではないか。いかに科学が自然を征服しても女子から女性を奪い去ることはできない。

鳥に似てトリ済したる婦人なり

中高にして眼鋭く

ライオンに似たる女性の逞ましき

面頬にかけタテガミを垂れ (註四)

このような女性も少くはないが、それにもかかわらずこれら女性は女性の特徴を失つてはいない。そこで将来のことは別として少くとも現階段においては女性のためにはその教養について、その職業

教育について特殊の配慮をなす必要があろう。殊に急激に封建的社会風習から民主主義国家に移ったわが国において貝原益軒の女大方式な女性道徳から健全な民主的婦道に移行するために特別に配慮する必要があろう。また職業婦人の増加に伴い、婦人に適したる職業の研究、学科の設置など問題は少なくないと思える。要するにこれらは女子教育の実体をなすもので、私は多くこれにふれることをさげ、専門家の論説を待つこととする。

#### 四

最後に女子学校の問題について一言することとする。第二段に問題とした女子特有の教育が必要であることが確立されたとしてもそれは共学の学校において女子の選択科目として教授することが可能ではないか。言い換えれば女子学校は果して必要であるか。これは閑人の閑話ではなく具体的な学校につきしばしば耳にするところである。

しかるに今日わが国における女子学校の数は大へんなもので、今試みに基督敎学校敎育同盟の名簿をみても女子短大二九、四年制女子大一校、女子中高に至っては約八〇校ある。短大および四年制大学は共学制一般化以後に昇格したものか、あるいは新設されたものである。そこでそれらは社会的要求によるものか、あるいは教育本来の理由によるものか、あるいは両理由によるものか、であらう。もとより、これら四年制女子大の多くは旧専門学校から昇格したもので、単に、歴史的連続という理由によるものであるかも知れない。

米国においてもスミス、マウント・ホリヨーク、プリンモア、

バツサル等々著名大学が少なくない。更にコロンビヤ大学のごときは男子だけのコロンビヤ・カレッジ、バード・カレッジのほかに、女子だけのバーナード・カレッジをもっている。これらは皆大学共学普及以前に出発したもので、歴史的伝統をふり切れないと思うこともあろうが、それだけではなく、女子大特有の存在理由があると思う。しからばそれは何か。この設問は女子大だけに對してではなく、女子中学校、女子高等学校に對しても向けられる設問である。これに對して的確なる解答を与えることは、それらの学校に關係する人々にとつて重要な問題である。これができないときは経営者は経営上の都合により女子学校を(男子学校もまた)廢して共学一本にする可能性がある。

以上、私は女子教育論の必要性につき、一、女子教育の前提としての一般教育論 二、女子特有の教育必要性の確立 三、その内容の研究 四、女子学校存在理由の明確化の四つを並べた。が、いま一つ重要な問題がある。それは、女子教育とキリスト敎との關係である。その理由は残念ながら紙面の都合で省く。素人の意見であるからそのつもりで読んで頂きたい。(前総長・神学部名誉敎授)

註一 渡辺万次郎(前秋田大学長)「時代と女性」IDE教育選書一〇三参照

註二 Life, Vol. 39 No. 9, 1965. Nov. 1, pp. 54ff. ボロニヤの醫師ダニエル・ペトラッキは人工培養で胎児を五九日間成長せしめたといわれる。

註三 Newsweek, 1966. April 18. pp. 62ff. 1966. May 9, pp. 36ff. 1966 June 27, pp. 36ff. 1966 Oct. 3 pp. 40ff. 其他

註四 「政界往來」四〇年十一月号三四頁、軟扇子。

# 『資本論』と同志社

—『資本論』一〇〇年を思いついて—

住谷悦治

日本における『資本論』とそれを読んだ人びと

「資本論と同志社」という内容の歴史的に豊富な、大きなテーマを二百字二十四枚くらいで書くというような手際のいいことは、わたくしには出来そうもない。どうせ尻切れトンボの雑文に終ることをはじめから覚悟して、羽毛で撫でていどに書いてみる。将来補う機会もある。よくマルクスやエンゲルスはもう古くさいカビの生えた十九世紀思想だなどと囁んで捨てるようなことをいう思想家や学者や教授が得意そうに述べているのを、わたくしは知っている。わたくしがそんなことを指摘するよりも、先日、日本を訪れて各地で講演したフランスの作家で世界的な思想家サルトルが、さきほど約一カ月の日本旅行を終えて十月十六日午後七時半羽田発の飛行機でロンドンへ向ったが、これに先立って、同五時すぎ、東京・赤坂

のホテル・オークラで最後の記者会見をし、「東京の近代化には驚いた」などと日本の印象について語ったあげく、痛烈な捨てりふを残して空へ立ち去った。曰く「近代化された東京と、静かな古都京都が共存するように、日本には伝統と近代化の二つの面が共存していて、そこに私は強くひかれた。日本の社会は繁栄していて、おまえのような古くさいマルクス主義は通用しないという批判がある。うだが、それはニセのインテリのいうことだ。日本の労働者の賃金がフランスの三分の二にすぎない現実を直視すれば、私の正しさがわかるだろう。広島では、被害者が見捨てられており、彼らを救うために私たちは戦うべきだ」(朝日新聞)十月七日)と。サルトルのマルクス主義が古くさいなどと批評した日本の華形評論家の清水幾太郎も顔色なしに反批判されてしまったが、もうサルトルは日本にいない。それはともかく、マルクスが古くさいとか、『資本論』

はもう単なる歴史的文獻だなどと批評する学者や教授や思想家にかぎって、『資本論』を通読もしていないようだ。現代社会に、社会的・経済的矛盾が存在するかぎり『資本論』は生々とその生命を保っている。ドン・キホーテが風車に立ち向って大さわぎしているようなものである。

それはともかくとして、マルクス、エンゲルスの『資本論』が、日本人に何時ごろから問題として取りあげられたのだろうか。マルクスは一八八三年（明治十六年）に死んだのであり、『資本論』の第一巻が公刊されたのは、一八六七年九月で明治維新の前年のことである。貧困のうちに書きあげた苦心のこの歴史的努力は、発行部数僅か一千部で、それも売り切れるのにまる四年もかかっている。いま世界数十カ国に訳され、日本でも次に示すようにいく種類の訳本が何万部も売れるという盛況を、誰れが予想しえたであろう。出版当時エンゲルスやマルクスの友人たちが汗水流して宣伝して売り歩いても、四カ年に一千部というような状態だったのであるから書物には、それ自身の運命というものがあることをつくづく考えさせられる。

日本では、マルクスとかエンゲルスとか『資本論』とかいう名前の紹介はいづごろからであったか。早大の木村毅博士や東大の鈴木鴻一郎教授が、そういうことについて詳しく研究しているから、篤志家は、それらによって学んで欲しい。マルクスの思想の紹介は簡単にではあるけれど、同志社の第一回の卒業生であって、後に靈南坂教会の牧師として有名になった小崎弘道で、明治十四年の『六合雜誌』に「近世社会党の原因を論ず」という論文の中で、マルクス、

エンゲルスの名が他の多くの社会思想家とともにほじめて紹介された。小崎先生は熊本バンドの人びとの指導的立場にあったようだ。

『政教新論』は当時の名著である。木村毅博士は、『資本論』がほじめて紹介されたのは、明治二十六年（一八九三年）の東京帝国大学法科の『国家学会雑誌』に掲載された草鹿丁卯次郎の「カル・マルクス」という論題の論文であるという。木村博士は、この草鹿の紹介文は、恐らく『資本論』の原典そのものによった紹介であろうが、そうでないならば、原典と同じような優れた紹介書に拠つたものだろうと推賞しているが、他方、鈴木鴻一郎教授は、この草鹿の『資本論』紹介は『資本論』の核心的部分を適確に紹介していないと言っている。この問題は、別に研究の課題である。重久篤太郎教授は、過日、わたくしとこの話をし合ったとき、『同志社文学』第七号（明治二十六年十月二十日発行）に佐々木多門が「社会改造的ユトピア一斑」という論説（十二頁以下）に次の一節のあることを教えてくれた。『カール、マルクスの著書 Das Kapital の如きは最も研究の価値あり。爾来社会問題は一変し単に労働者に関する実地の問題となりて「ユトピア」を案出するものとなりしが……』云々。マルクスや『資本論』は、やっぱり同志社と早期から関係があるといえよう。

マルクスの『資本論』原典に即して、最も適確に、ほじめて日本に紹介した者は誰れか。ここでまた同志社出身者が出現する。少年時代を同志社に学んだ山川均である。明治四十年八月から「大阪平民新聞」に連載された山川均の「マルクスの『資本論』」という論文であるといわれている。山川均によれば、その年よりもっと以前

に、明治三十五年（一九〇二年）に、すでに『資本論』第一巻の英訳本を買い求め、「何回も繰返して読んだ」という。もちろん読んだことが必ずしも正しく理解されたということと同じではないにしても、『資本論』を繙読したという点ではまず日本での初期に属している。読むということだけならば、長谷川如是閑はすでに明治二十六年から三十一年ごろにかけて、青年時代に東京法学院在学中、上野図書館で『資本論』の英訳本を読んだということである。そのことは如是閑の「自叙伝」の二〇五頁に書いてあることで、鈴木鴻一郎教授によれば、上野図書館は、すでに明治二十年（一八八八年）に一八八六年刊行の『資本論』を購入しているとのことである。その英訳本というのは、エンゲルス編、ムアおよびイヴリングの訳したもので、文献史上有名なものである。

わたくしは、正確なことは知らないが、日本人で『資本論』を早期に読んだ人として、西園寺公望がいたという噂をきいている。彼れは維新直後からフランスに長く留学していたから読んだとすれば、早期の『資本論』のフランス訳を読んだのかもしれない。さらに、新渡戸稲造博士の書いたものを読むと、博士は随分早期に、フランス留学中フランス語訳の『資本論』を読んだとのことであるが、わたくしはその年代をいま覚えていないし、博士の著書の中で確かにわたくしはそのことを読んだ覚えがあるから、博士の外国留学の跡を丹念に辿ってみるならば、より正確にわかることであるが、いまそのヒマがない。社会政策学会創立者の福田徳三や桑田熊蔵、高野岩三郎などおそらく、読んだとしても、ずっと後のことである。楠田民蔵や河上肇博士など、やはり福田徳三より後に読んだのである。

うが、いま正確に言えることは、同志社出身の山川均と東京法学院（後の中央大学）の長谷川如是閑と、新渡戸博士などであろう。

### 『資本論』の訳者と同志社

前述のように『資本論』のよき紹介者は同志社出身の山川均であるが、その明治四十年の「大阪平民新聞」には、『資本論』第一巻の邦訳が安部磯雄氏の手によって数年前から企てられているという記事が載っているばかりでなく、山川均が、当時『資本論』の紹介論文においても、そのことを証明しているのである。このことを手元の文献によってもっと詳しく実証したいが紙幅がない。同志社の先輩安部磯雄が日本の社会主義史上の輝ける存在であり、明治三十四年の日本最初の社会主義政党である「社会民主党」の六名の署名人のうち有力な創立者であるのみでなく、その優れた綱領を執筆したのも安部磯雄であり、その綱領は七ヵ条の「理想綱領」（原則綱領）と二十一ヵ条の「実際運動の綱領」（実践綱領）に分つてあるが、世界の社会主義政党のどれと比較しても、優るとも劣らないとの評のある綱領である。それはともかくとして、あのむづかしい『資本論』をそのころ訳しつづけたことは、どんなにか苦心であったかを想像する。しかし安部磯雄のその原稿がいまだに発見されないのが何より残念である。

『資本論』を日本で最初に訳した功績は高島素之に与えられることは周知のことである。高島は前橋中学卒業者で、わたくしの中学の先輩であり、大正十年にわたくしが本郷の帝大基督教青年会寄宿舎にいたころ、その隣りの裏長屋の一室で翻訳していた時、わたく

しは彼を訪れ、彼から『資本論』のドイツ語版(カウツキー版)をはじめて見せて貰ったり、彼の写真を貰ったり、『Wissen ist Gewalt, Gewalt ist Wissen』「知識は暴力である。暴力は知識である。」という言葉を書いて貰ったが、それをいまでも大切に所持している。『資本論』の邦訳は、ほとんど同時に三人の訳者によって三種類が公刊されたのはわれわれには一つの驚きであった。最初現われたのは大正八年(一九一九年)九月〜十二月の松浦要の訳本で第一巻第一篇三篇までで製本は粗末なもので、それ以後はもうつつかなかったし、誤訳の多い評判の悪い訳本であったが、原典はエンゲルス版であつたらしい。出版社は経済社出版部で、価格は第一分冊一円八〇銭、第二分冊は二円五十銭。同時に文学者生田長江の訳が、同じくエンゲルス版を底本として第一巻の第二篇までで、やはり斐



高島素之とそのサイン (住谷蔵)

丁は粗末であり、以後中止された。出版社は緑葉社で定価二円二十銭であった。生田は、難解のニーチェの「ツアラツストラ」の訳者であるが、高島素之は、生田の『資本論』の翻訳は商売仇でもあるといふことで、その誤訳の数々を痛烈に指摘したものである。大正九年(一九二〇)三月に山本義人が「マルクス全集」と銘打った一部として松浦要の訳本に拠って、第一巻、第三篇まで抄訳したが、当時の読書界には黙殺された形であった。

高島素之の訳本は大鏡閣版として素晴らしい立派な装丁で、大正九年六月、第一巻第一冊(「資本の生産行程」)が公刊され、価格六円九十銭で学生には痛いほどの高価であったが、魅力百パーセントであり、福田徳三校註で、この高島訳だけでも、翻訳のいきさつ、その序文、翻訳協力者の裏話等で長文を必要とする。

大正十三年七月に、日本で、はじめて『資本論』の全訳が彼によつて成功し、マルクス主義理論に偉大な貢献を果たしたが、彼は同志社中学中途退学であり、新島先生への批判者であり、努力奮闘の独学者であり、その意味からも同志社としては忘れてならぬ人物である。『資本論』については「同志社文学」の佐々木多門、山川均の、梗概書『資本論大綱』や安部磯雄、ついで高島素之であるが、さらに特記すべきことは、同志社教授であつた長谷部文雄氏が、その後忠実な、模範的な完訳に二十年の歳月を費した。長谷部夫人は、その原稿を、今治市の住居から東京の印刷屋に渡す前に、すべてノートに写し取り、長谷部氏の大切な原稿の万々一の紛失へ対処したと思われるが、その驚くべき内助の努力は、トルストイ夫人が、『戦争と平和』を何回か書き改めた苦心を思い出す。わたくしは、山と

積まれた夫人の『資本論』筆写の大学ノートに向つて、襟を正して  
凝視したものである。長谷部夫人は、このための過労でついに失明  
するようになされたことは痛ましき限りであるが、長谷部氏の完  
訳についての執拗な細心・着実の苦心談について、わたくしは、原  
稿紙を何枚書いても書き足りない気がするのである。長谷部訳『資  
本論』の翻訳書としての権威についてはわたくしの贅言を要しな  
い。同氏著『資本論随筆』を参照して欲しい。

高畠訳の新潮社版および改造社の「マルクス・エンゲルス全集」  
に組入れられた翻訳についても述べたいことが多いが、わたくしは  
新潮社版が最も良いと思う。

高畠訳『資本論』の廉価版が刊行されつつあったとき、河上肇・  
宮川実共訳の『資本論』が、「岩波文庫」版として九冊二十銭の廉価  
で刊行されはじめたが、これは昭和二年（一九二七年）から同四年  
六月にわたつて五分冊が刊行され、第六分冊以下は刊行されず、既  
刊のものも絶版とされた。これについては岩波茂雄と河上肇との複  
雑な公話も秘話も知っているが、そのようなことにここで触れたく  
ない。何れにしても、河上博士は大正のはじめに同志社大学法学部  
で講師をしたことがあり、宮川実氏も大正から昭和にかけて、同志  
社大学法学部講師として長谷部氏やわたくしと同僚として親しい友  
人である。

このように『資本論』の紹介と翻訳については、その早期におい  
て密接濃厚の関係がある。翻訳本には、もちろん向阪逸郎氏の良訳  
があるにしても、同志社と『資本論』との関係はとくに関係が深い  
ので、『資本論』という社会科学・経済学上の稀れにみる優れた著

書百年の書物としての運命を回顧しつつ擲筆する。

#### 追記 同志社中退者

俗説かもしれないが、同志社中退者には偉い人が多いとか、著名  
になった人が多いとかいう話をしばしば耳にする。蘇峯・芦花兄弟  
は必ずその例にあげられる。戦後は公然と山川均・高畠素之の名が  
出る。天野茂助教授によつて克明な研究を添加し編纂された「荒村  
遺稿」が復刻公刊されたが、足尾銅毒事件のころ国内を講演して歩  
いた木下尚江から、当時稀れにみる真実な英才と認められた同志  
社生松岡荒村は、幸い天野助教授の長年の努力によつて再び文壇・  
評壇にその姿を現わした。わたくしは高畠素之とともに遠藤無水  
（友四郎）が、かつて同志社人であったことを聴き知っている。こ  
れらはホンの一部分である。地方校友会などに出席すると、真に尊  
敬に値する「誰れ誰れも同志社中退だ」という話をいくつもきいて  
いる。それらの人にかぎつて熱烈な同志社愛に燃えているのはどう  
いうわけだろう。上州の半田隆一氏。大学の正門や、香里中高の正  
門前の新島先生の「良心の碑」や、大学記念会館の中庭の「和氣満  
堂」の碑。その石さえもすべて半田さんの熱意の賜である。歌を忘  
れたカナリヤでない同志社の校友・同窓の人びとよ。同僚の罪を一  
身にひつかぶつて愛する同志社を中退したり、その他、気の毒の事  
情で中退したかつての同志社在籍者をできるだけ探がし出そうでは  
ないか。山川均先生のように、同志社に迷惑をかけぬようにと、長  
い年月の間、同志社人たる過去を遠慮している人が、きつと多いに  
違いないと思う。

（総 長）

# 勤勞青少年の教育

藤代泰三

去る四月に生徒総数五六六名を有する同志社商業高等学校の教育に關係するようになってから、わたしは新しいことをいろいろと学び、この学校の教育についてののみならず、全同志社の教育についても考えさせられるところが多い。

ある日わたしは、商業高等学校が今後存続する必要があるのかどうかと質問を受けたとき大きな衝撃を受けた。わたし自身この学校に關係するようになったとき、果して勤勞青少年はどのくらい在学しているのであろうかが、一つの疑点となった。そこで最近、第一学年生全部の生徒指導要録に目を通したのであるが、その結果、勤勞青少年の数の非常に多いことに気がつき、本校存続の意義を新たに痛感せしめられた。第一学年生一四七名について調査したのであるが、そのうち昼間勤務者は八四名を数えた。これらの生徒たち

の職種をみると多種多様であるが、そのうち特異なものをあげるとつぎのようになる。括弧内は就業時間である。染物工（午前八―午後五・三〇）、一つ身図案工（八・三〇―五）、医療書販売（九―五）、スーパーマーケット販売店員（二〇―五・三〇）、京都大学付属病院看護婦（手術関係）（八・三〇―五）、染色工（八―五）、印刷工（八―五）、加茂川病院看護婦（八・三〇―五・一五）、京都大学医学部、小沢病院看護婦（八―四）、帯地検査員（八・三〇―五・三〇）、配電会社（八―五）、旋盤工（八―四・五〇）、書店員（九―一五）、商品管理人（八・四〇―一五）、大丸店員（九・四五―一六）、自動車修理店経理事務（八―五）、自家眼鏡店勤務（二〇―一五）、帯製造事務（八・三〇―一五）、自家金物店勤務、練染工（八・三〇―一五）、冷暖房設備水道工事（八・三〇―一五・三〇）、蓄電池製造工（八―一四）、織物機械調整工（八・三〇―一五・三〇）、意匠製図（九―一五）、織布工（八―一五）、電通京都支局総務部庶務（九―一五）、松川

工務店木工および現場監督（八一五）、洋額製造（八・三〇一五・三〇）、証券業気配取り（八・四〇一四）、京都ステーション・ホテル調理人（八一五）、呉服店販売（九一六）、自動車修理、輸出関係タイピスト（九一五）、夕刊京都編集局（九一五）、レジスター組立工（八・五〇一五・一〇）、帯地製造事務（八・三〇一五）、精密工業現場事務（八一四・二五）、紙業切斷（九一五）である。

定時制高校生の大きな問題の一つは、職場の働きとそこにおける人間関係であることをわたしは痛感させられているが、かれらは中卒として最も低い仕事に従事しているといっても過言ではないであろう。わたしなどの味わったことのない経験を、かれらはその職場で味わっているのである。しかし定時制高校生としてのこのような現実は、同志社商業高等学校の生徒たちに限ったことではない。高塚暁著『定時制』（一九六〇年発行）によると、「現在、全国で約三、〇〇〇校の定時制課程が全日制高校に併設されたり、独立校として存在したりして、生徒数約五、四万をかかえている。全日制生徒約二、三万五、〇〇〇に比べると約二倍以上の数になる」とある。もちろんこの定時制生徒のなかで、夜間に授業を受けている者は、約三、八万であり、昼間にうけているものは約一、四万七、〇〇〇、昼夜間授業をうけているものは九、〇〇〇人となる。従って他の多くの定時制高校と同じように、同志社もこれら高校生の重荷をになっっているわけである。

本校生徒らの家庭の状況はどうであろうか。第一学年生徒一、四七名のうち、裕福と考えられる家庭は九であり、かなり貧しいと考えられる家庭は二、五であり、他は中位と考えられる。この中位の幅は

かなり大きい。

遠方の地方の出身者が、これら全生徒の約一割近くを占めていることを知って、わたしはいよいよ本校存続の意義を深く自覚したのである。前記の京都大学付属病院看護婦として手術関係の仕事にたずさわっている生徒は、愛媛県の出身であり、加茂川病院看護婦として働く生徒は、岡山県の出身であり、小沢病院看護婦として働く生徒は、高知県の出身である。スーパーマーケット店員として働く生徒は、福岡市の出身で、中卒時の成績はAクラスであり、その父はかれの幼時に死亡し、母は長崎で働いているという。染色加工として働く生徒は宮崎県の出身である。学問がしたかったが、家庭の経済がそれをゆるさなかったという生徒は、宮崎県西臼杵郡の出身である。また本校近在のいづくら工業株式会社から四名の女子の一年生が在学し、これらの生徒はいづくら工芸寮に入寮しているが、中卒時の成績はいずれもAである。そのうち一名は、高知県の出身で、その父は三月から十月まで三崎基地からかつを船に乗船して働くが、それ以外の時は、自家営業の一本釣に出るという。また他の二名は徳島県の漁業を営む家庭の子女である。前述の織物機械調整工として働く生徒は、秋田県の出身で、中卒時の成績はAクラスであり、バスケットの選手であった。その他鳥取県出身の生徒や近江八幡市出身の生徒もおり、もちろん阪神地方在住の生徒もいる。

## 二

本校の生徒が一般に極めて明るく、元気なのを見て驚く人々が多いが、わたしもその一人であった。昼間職場における仕事と人間関

係からの重圧に耐え、働いてきた生徒たちにとって、この学校は勉強と友情のオアシスなのである。生徒と教師の間も親密で、わたしはここに塾的教育がほどこされていくように思ったりさえもする。

自宅通学の生徒が多いが、なかには下宿したり、前述したように寮生活をしている生徒もある。学費は自己が全額負担しているものや、一部負担するものもあり、家庭に送金さえしている生徒もある。かれらは働きつつ学び、学びつつ働いているのである。この意味で、単に勉強一途に没頭できる生徒とはちがった次元で、人生の尊いものを身につけつつ成育していると考えられるのである。

さて第一学年一四七名のうち、中卒時の成績を調べてみると、Aクラスとして考えられる生徒は二〇名であり、Cクラスとして考えられる生徒は一四名であり、あと一―三名はBクラスに属する。

いづから工業株式会社勤務する前記の一生徒はつぎのように言っている。「わたしは高校へ進学したいと思っていたのですが、いろいろの都合により就職することになりました。さいわい会社の近くにいい学校があるというのを聞き、ぜひとも入学して勉強し、できれば教職の資格でもとってみたいと思いましたが。がんばってみたいと思います。」このような困難な事情のもとに入学した生徒は、ほかにも数多くいる。

本校の生徒のなかには、働かねばならなかったため、二、三年おかれて入学した生徒や、一年生のなかには一二年おかれて入学した生徒一名と一八年もおかれて入学した生徒一名がいる。これらおかれて入学した生徒たちにとっては、勉強は極めて意欲的になされるわけである。本校卒業後就職を希望する生徒もかなりいるが、第一

学年生一四七名中、八一名までも入学時に、将来大学教育を受けることを希望している。わたしは本校の生徒は、勉強意欲が相当強いものと思っている。しかし昼間の働きの疲労のため、十分に教育の効果があがらないことを憂えているが、このような難点を克服するために教員方は努力しておられる。

わたしは本校の生徒が、勉強への意欲をますます盛んにするとともに、自分でよく考えよく工夫して学問を身につけていく創造性を養ってほしいと思っている。研究意欲と創造性を保持すれば、生徒の知的発展は大いに期待しうらと思うからである。また前述したように、大学進学希望者が非常に多い点から考えて、かれらのため同志社に短期大学が設置されればよいと願っている。

教科内容については、商業教育を年ごとに次第に充実していきたいと思うし、また生徒たちの長い将来における人間形成や、大学への進学を考慮すれば、教養科目の面における教育もいよいよ重視されなければならない。

このような観点から、図書室の充実は年間を通して努力していかねばならない重要事である。なぜなら始業前、あるいは休講時に、図書室における自学自習によって、生徒たちは学習意欲をさらに育てていくことができるからである。まして個人所有の図書の購入が経済的に困難である生徒たちであるから、充実した図書室を提供したいと願っている。現在本校では司書を欠いている。しかし図書の完全な保管と整備は、生徒たちの図書利用に大きな利益をもたらさずがゆえに、司書の存在は不可欠なことからである。

本校に関係するようになって、わたしが驚いた他の一つは、一週

一回の四五分の礼拝の出席者が多いことである。礼拝には本校生徒は全員出席しなければならないことになっているが、わたしたち教員は出欠をとることはしていない。にもかかわらず生徒の出席数は非常に多いのである。その数は第一学期に比較すると、第二学期には減少するとはいえ、依然として多く、第一学期で出席者は当日登校の全生徒の約九割であろう。礼拝において生徒たちが何かを求めている姿勢がよく分る。生徒たちのなかには、礼拝に出席するたびに、人生の諸問題に関して一つ一つなんらかの解決が与えられると語ったものもいる。ことに喜ばしいことは、当日礼拝出席可能な教員は全員これに出席することである。また洛陽高等工業学校を昭和四〇年に卒業しておりながら、新島精神を学びたいからとて本校に入学した一年生もいる。

### 三

わたしはここで同志社の庶民教育について考えたい。同志社教育は本来広く一般の人々にその門戸を解放しているものである。しかし今日の学費の増大は、ある一定階層の子女のみが教育を受けることを可能にしている。このことは中高教育において殊に顕著である。同志社教育を真に受けたい者、またこれを真に受けるに備する者に、これは与えられなければならないのであるが、莫大な学費は、ある階層以外の子女が教育を受けるのを困難ならしめている。日本における一般私学の現状から見ればやむを得ないと言ってしまうまでもであるが、果して同志社教育とはそういうものであつてよいのであろうか。基督教主義に立つ教育はそれでよいので

あろうか。わたしは、このようなことを同志社教育に関して真剣に問うてみる時期が今到来しているように思う。同志社商業高等学校には財政的にみて種々難問が存するとはいえ、同志社のなかにあつて庶民層に深く密着しているのは、本校だけではあるまいか。このような点から考えてみると、曲り角に立つ同志社教育に、一つの進むべき新しい重要な方向を本校は示唆しているようにも思えてならないのである。

この学校にくるのがほんとうに楽しいと言う勤労青少年に、暖かい愛情に満ちた教育の場が、今日まで同志社本部や同志社大学をはじめ、他の方々の理解と支援のもとに提供されてきたことを感謝しているが、この教育の場をいよいよ充実していくことこそすれ、せばめてはならないと衷心から願うのである。前途にどんな光明があるかを思いわずらうのではなく、そこに光明をつくり出していくものでわたしたちはありたい。

(昭和十七大神卒・商高校長)

× × ×

× × ×

## 京都看病婦学校と 同志社病院のことも

長門 谷 洋 治

京都看病婦学校・同志社病院は新島襄の創始になるもので、ひとり同志社史上に特記すべき事項であるのみならず、わが国看護学史医療史の上でもきわめて注目すべきものである。ただ惜しいことに京都看病婦学校はその後同志社の手を離れ、同志社病院も消滅してしまつた。京都看病婦学校・同志社病院については現在同志社に貴重な史料も残っており社内には優れた研究者が多数おられる。社外の者である筆者がこれについて、本誌に記すことは汗顔のいたりであるが、今後のご高教を得る意味であえて筆をとらせていただいた。

### 医学部創始の企画

京都看病婦学校の構想は最初からあつたものではない。新島は当初医学部の設立を考へていた。明治十五年初夏のころ、このことについて当時有馬に静養中だつたベリー (John C. Berry 1847-1936 明治五年来日した宣教師、最初神戸、のち岡山に定住、アメリカン・ボード所属) に相談し、賛意を得ている。しかし医学部設立については二つの誤算があつた。その一は京都の大村達齋なる者が経営する洞酌医学部というのがあつたが、これを新島に無償提供すると申し出たのである。明治十六年一月二十三日には新島は大村、中村栄

助、伊東熊夫らと医学部設立につき結社のことに決定しているが、これは上のことを考慮に入れての話であつたであらう。新島は三月十五日には岐阜県立医学部を視察、その規則書ももらつて来ている。しかるに四月八日、中村栄助あての書簡では医学部について触れず「看病人学校之事ニ付、一応御相談仕度」としている。この間の事情は不明であるがなにかがあつたようである。既往の文献では大村の医学部提供につき、彼に「食言」があつたとある。その内容はわからない。結果として医学部はできず、急拠看病婦学校創設にきりかえられた。これはベリーがわが国にも近代看護教育の必要をかねてより力説しており



リチャーズ



ベリー

医学部創設の前段階として看病婦学校とその実習施設たる病院の建築を進行していたからでもあり、前述の経過とあわせこの方向に進んだものと思われる。

この資金を得るためベリーは明治十六年三月より翌年九月まで帰国、募金に従事する。そしてその応募者の一人、英人モートンは十万里を寄付すると申し出た。当時としては大金である。しかしこれがまた同志社に活かされることにはならなかった。それは当時まだわが国に寄付行為に関する法規が整っておらず、ためにこれを受入れることができなかったのである。

### 創立まで

京都看病婦学校・同志社病院の設立資金はすべて寄付によった。その合計は約七千二百四十円。うち日本人による分が千百三十四円

余で、その中の千四十四円で京都市島丸長者町かどに千九百五十五坪八合の土地を買い入れた。そして外国寄付金六千五百五十銭がその建築費となった。現在この地には京都民生会館がある。普請入札は明治十九年十月十七日に行ない、翌年竣工した。しかし十九年の秋より同志社職員デビス氏宅で、ベリーらにより授業を開始している。この十九年には注目すべきことが二つある。一は一月の看護婦リチャーズの着任である。リチャーズ(Ulinda Richards 1841-1930) はアメリカ最初の資格看護婦 America's First Trained Nurse として著名な人物で、当時ボストン市立病院総看護婦長兼看護学校監督の要職にあつたのを、ベリーのアメリカン・ボードへの要請に応じ単身来日したものである。彼女は明治二十三年十月帰国するが、この間にわが国近代看護確立のため果たした役割は大きい。その二は九月二十日、ベリーが大日本私立衛生会京都支会の席で行なった『京都看病婦学校設立に関する演説』である。この演説はわが国の市民に近代看護の必要性を強調した点で、女性史の上からも画期的なものであるといえよう。明治二十年七月二十日には京都府へ設立願を

出し、同八月十一日認可、同十一月十五日盛大な開院・開校式が行なわれた。ところで新島の発意によつてなつた看護学校になぜ同志社の文字が冠せられなかったのであろうか。このことについて佐伯理一郎は「病院には同志社の名を冠らせて他日医学部のできた場合に都合よろしからんことなりしかども、看病婦学校の方は京都の有志者の寄付によつて成り立つものゆえ、京都看病婦学校と名づけられたるなり」と述べている。しかしこれにはベリーも不満だったようで、明治二十年十月四日新島より中村栄助あて書簡中に「京都看病婦学校之名称変換之事をベレー氏より差迫り申候間……」会議を開き自分の考えも述べたいので、同日四時に山本(覚馬)宅へ来て欲しいと述べている。ベリーは無論、同志社看病婦学校の名を提言したのであるが、これに対し新島がどのような意見を述べたのか、今は知る由もない。しかし結果的には名称変換は行なわれなかった。なお看病婦の文字であるが、当時はまだ看護婦という言葉が一般化しておらず、新島が Nurse に対しかかる訳語を与えたのであろう。本校は看護教育機関としては、明治十七年の桜井女学校内

の看護婦養成所および同年の有志共立東京病院（慈恵医大前身）看護婦教育所に次ぐものであり、関西では最初のものである。

### 初期の状況

明治二十年四月には英文の“The First Annual Report of the Doshisha Hospital and Training School for Nurses”を出し、その事業内容を詳しく述べたあと、外来患者の病名別分類を行なっている。最初の入学者は五名、うち四名が二十一年六月に卒業。修学年限二年。四名の出身地は北海道、東京、神奈川、岡山で、地元京都からの出身者は第三回までの十七名中にはみあたらない。第二回卒業生からはのち同校の同窓会長となって、同校の廃止に反対し、また初代京大総看護婦長となった不破ユウ（旧姓北里、夫は不破唯二郎）が出ている。同校卒業で現存の最長老は明治二十六年卒の岡本（旧姓上野）老野であり、昭和四十一年十二月には満百歳を迎えた。氏は現在神奈川県二宮町に住み、新島ベリー、リチャーズなどを直接知る貴重な人である。

リチャーズがその自伝 “Reminiscences of

Linda Richards” (1911) で語っているとるによれば、病室において静肅が守られず沢山の見舞客のあること、ときによると患者の枕許で騒々しい加持祈禱の行なわれること、一般に男性患者は看護婦の地位と重要性が理解できず、ために看護婦の指示をきかないが教養ある婦人すら看護婦を嫌って自家の女中を連れてくることがあると述べている。

看護婦のユニホームはすでに今日と大差ないもので、わが国でこのユニホームを採用したところとしてはもっとも早い方であろう。当時は洋装そのものが珍しかった。はきものはわらぞうりを用いたが、これは音がしなないと推奨している。食餌療法も講ぜられたが、これまた当時としては珍しい西洋菓子の作り方などもその内容に含まれた。

いとおくれたが発足当初のスタッフは校長新島襄、院長兼教師ベリー、看護婦長兼教師リチャーズ、教師（医師）バックレー Sara C. Buckley（女医）、白藤信嘉、川勝原三、病院助手堀俊造の各であった。病床は三〇。当時わが国では医学教育は慈恵などの一部の例外を除いてドイツ系であった。そのときに医学と密接不可分な看護学領域でアメリカ系が採

用されたことは興味ある事実である。新島がそこまで見透していたか否かは疑問であるが、近代看護学の創始がイギリスのナイチン



京都看護婦学校の外観

ゲールであることを思うとき、その流れを引くアメリカ看護を導いたことは、全く正しい方策であったといえよう。

### 新島死去の打撃

明治二十四年濃尾大地震のさいはペリーを中心とする同志社病院のスタッフが現地に行き、救助活動を行なった。この年の入院患者数二百、外来患者数六千七十八である。リチャーズ後任にはフレージャー Helen E. Fraser が着き、明治二十四年よりはペンシルバニア大を卒業し帰国した佐伯理一郎が就任した。それにしても発展途上にあつたとき、明治二十三年一月の新島襄の死はやはり大きな打撃であつた。明治二十三年教育勅語發布をひとつの機として、国粹反動の抬頭、キリスト教関係教育機関への圧迫などの外部事情に加ふるに、内部では病院常議員中にも小崎弘道、湯浅治郎などの中央集権主義に対する反感が表面化してくるなどがあつた。そして明治二十六年、当時わが国で専門化の遅れていた耳鼻咽喉科学を同志社病院に導入しようとしてペリーに勉強に行ったペリーに対し、同志社が送った通知には再び同志社に帰つても院



上野老翁さん（明治26年、第6回卒）の卒業証書

長は解任し、一職員として遇するといふものであつた。ことここに至つてはペリーも同志社を辞任するの他なかつた。新島を除いては京都看病婦学校・同志社病院の最大の貢献者であるペリーに対して、同志社のとつた態度はこのように冷淡なものであつた。ペリーはその後大正七年、その功績に対し勲三等瑞宝章をわが国より贈られたが、同志社は彼に對しその後どう遇したか。今からでもよい。ペリーの顕彰を考えるべきであろう。明治二十八年十月にはアメリカン・ボード派遣使節が京都に来、同志社全権委員と談判、このとき京都看病婦学校・同志社病院の管理権の問題も議せられた。その結果、事業の継続には賛意を示さず、これら財産を原寄付者に返戻することに賛意を示した。

### 佐伯理一郎の管理

明治二十九年三月の同志社社員会は病院・学校を廃止し、善後策は病院、学校の委員において定めるとし、同八月の社員会のできるだけ原寄付者に返すこととしている。同年八月、佐伯理一郎が敷地の一部（二百五十七坪）とその地面の建物を千円で譲り受けている。そして明治三十年五月一日より佐伯理一郎が学校、病院を管理（これまでは同志社社長が校長であつた）、会計も同志社を離れて独立したものとなる。それまでは経常費もそのほとんどがアメリカン・ボードを通じて賄われていたのである。しかしこの時点では学校・病院の土地、建物は従前のままであつた。同志社はここに目をつけ、明治三十六年三月、理事會において、同志社の財政不如意なるにより、同志社病院閉鎖、看病婦学校廃止の議論を起した。つまり土地・建物を売り払おうとしたのである。デビス、田村初太郎、松山高吉の三名が委員となり調査にあつたが、生徒の動搖は隠せなかつた。しかしこの方針は明治三十八年に入り一層明確となつたので同七月より同窓会は表面的な反対活動を起す



第四回看護婦学校卒業式（明治二十四年）

にいたった。その後迂余曲折を経たが、明治三十九年三月二十九日京都看護婦学校理事会はついに同校を下京区柳馬場通綾小路下ル永

原町の佐伯病院に移転、同志社病院は同志社に返却することとして、ここに完全に同志社と縁がきれた。彼女らが反対した理由の一名儀上土地・建物は同志社のものとな

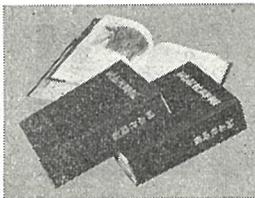
っていたが、これらには同志社の財投資は全くなく、すべて内外人の寄付によったものであるという点である。従ってアメリカン・ボードはこれらを原寄付者に返すことを勧告し、社員会もこれを認めたが、結局行なわれず、同志社のものとしてしまったわけである。その後どう処分したかについては知らない。

以上、京都看護婦学校・同志社病院について簡略なスケッチを試みた。京都看護婦学校・同志社病院のもつた意義の重要性について十分に触れることはできなかったが、これの影響は有形無形に今日なお生きている。新島襄の慧眼にいまさらながら驚くとともに、彼が望みながら果さなかった同志社大医学部の誕生する日を夢みたい。なお、文献は省略、文中敬称も略した。

（大阪・日生病院勤務・医師）

本を傷つけず ノリ付も不要で 合本製本できる

### 「同志社時報」合本ファイル



お申込みは

京都市上京区今出川通烏丸東入

同志社時報編集部

定価 100円 <送料50円>

## 京都府の同志社探索書

重久篤太郎

### 雇入米国人所業探索書

同志社開学から間もない明治十年代のはじめに、京都府が諜者を潜入させて同志社の外国人宣教師の動静を探索したことは、私の管見では、明治十年八月と同十二年六月に、京都府から外務省へ上申した報告によって知ることができぬ。

明治十年八月三日および同月二十五日の再度にわたる「新島襄外一名ニテ雇入米国人ノ所業探索書」は、その出所である京都府記録「外国人雇入一件」が失われているのみならず、外務省の外国雇入取扱記録からも見出すことができない。この時の同志社雇入のア

メリカ人教師は、英学校にはデビス、ラーネツド、テラー、ドーンがおり、女学校にはスタークウエザーがいたので、京都府の探索書では「新島襄等雇入米国人五名ノ者」の所業を探偵したことになるが、この中でドーンは妻の病気のためその年の五月に教師を解約になっている。これは、おそらく京都府の最初の同志社雇入米国人教師の探索書であり、外からみた同志社初期の史料となるものであるが、今はその内容を知ることができないことを遺憾とする。

明治十二年から同十七年に至る「同志社視察之記」は、京都府学務課の掛員が男女両校の外国人教師の授業を視察した報告書である

が、その第二回の「同志社景況記」（明治十二年六月二十四日）は、前月の視察の際には生徒の演説が中止されたり、デビスの修身学講義において聖書授業が行われたことを目撃したので、公然の視察では実情が知りたくいとして、身分を秘した学務課掛員を派して探索させた報告である。その諜者は他県人と称し、その子弟が入学を志望する態で、同志社英学校および同女学校の幹事や生徒から聖書講義のことを探ったが、第三学期の授業が終った休暇中であつたので、新島社長、外国人教師は神戸に赴いて不在であり、所期の探索は十分に行なわれなかつた。しかし、英学校では一生徒から、また女学校では山本覚馬の母から聖書講義のことを聞き出している。

「景況記」では、英学校を甲と称し、女学校乙とよんでいるが、次にその一部を引用して探索ぶりをうかがってみよう。

(甲) 乙校ヲ看督スル老婦ハ結社人山本覚馬ノ母即社長新島襄ノ姑ナリ。曰、世評皆云フ同志社ハ専ラ耶蘇教ヲ授クト。然レドモ必シモ然ラス。但シ本校ニ在ッテハ幼年ノ者ニハ毎晨早起正課以前ニ教師ノ居室ニ至リ聖書ヲ授カルコト少時間ナラシ

ム。正課ニハ決シテ之ヲ加ヘス。抑君ノ入學ヲ求ムル所ノ阿娘ハ齡幾何ナルヤト。

(四)甲校ニテモ亦曰ク、本校教師ハ合衆國宣教師トナリト雖モ必シモ耶蘇聖經ヲ教授スルニ非ス。唯人々ノ望ム所ニ從フノミ。今入學ヲ求メラル、人モ志ナラハ學フヘシ。無キトキハ之ヲ強ヒズト。

探索者ノ調査ハ、男女兩校ノ景況視察から同志社社則改正ノ無届ノことにおよんでゐる。

尙社則改正ノコトハ改正前何出ルカ、或ハ改正後届出ルカ兩條ノ内何レナリトモ必

幕大政府ヨリ申許可無之上右教師ニ聖經ヲ以テ社則内ニ教授任事ハ相許中間數若共其方ノ右ノ措詞ニ違背仕道ノ在共身分ニ未テ相當ノ所置可有之不然ルニ前月ノ視察記ニ述タル如ク其實ハ顯然ホトリイハイアルテテ聖書ヲ會議且書外ノ事ヲサヘ置且トシテ講説セリ是豈不都合ノ聖書ナラスヤ之ノ社長ニ語レバ則チ曰ク我輩基督ヲ信シテ當日ノ講説ニ課書ノ爲メ引用シタルルナリ諸君該場ヘ臨マルヤ此譯ノ書即チキニシテ己ノ修身學書既畢ラシニ生徒其書ノ論說ノ甚礎礎トセル處ノ耶ハ殊ノ教誡ノ付テ質問アリニ右教科書中ニ不足ノ分アリシカ故ニ止ムヲ得ス聖經中ヨリ稱比殊ノ語ヲ引用シテ答辨ニ及ビル而シテ嗚呼河内近隣自是キ吾輩ヲシテ目ナク耳ヤク且神識ナカラシモノハ則チ如何トモ云ヒ得可キ

「同志社景況記」の一節

ス履行セサル可ラサルノ義務ナルニ其愆ナク恣ニ改正シ印刷シテ之ヲ人ニ頒ツコト如何ニモ不都合ノ事ニコソ。さらに、最後の項では、次の如くに報告を結んでゐる。

(四)今獲ル所ノ改正規則ヲ觀ルニ増減スル處是レ彼レアリ。学科中又修身學ノ目ヲ除ケリ。是レ陽ニハ聖經ノ語ヲ引用スルコトモ為スマジト唱ル為メナル可キナレドモ其陰ヨリ之ヲ探レハ彼ノ第十一項ノ生徒ノ言ノ如ク必ス聖經ヲ授クベク又第十項ノ老婦ノ言ノ如ク必ス聖經ヲ以テ基礎トスルハ復タ疑ヲ容レサル所ナリ。表面益々恭順ニ赴キ而シテ内実弥々背反ニ進ムモノト称スルモ亦諷言ニハ非ルヘキカ。

### デビスの聖書講義

明治十二年四月、外務省は各府県知事宛に通達を出して、その管下の人民が学校教師として雇入れた外国人の業務課目明細書を雇主から差出せるとともに「時ニ學務掛之者偶然其教師場

ニ至リ業務上ヲ視察シ実地之景況ヲ詳シシ毎月末ニ當省ヘ可被届出此段相達候也」と照会した。

この外務省通達にもとづいた「同志社視察之記」にアメリカ人教師中でも最も早く登場するのはデビスであつた。京都府では、その翌五月二十八日に府學務課長横井忠直および属官一名を派遣して同志社英學校・同女學校を視察させた。その時教員デビスは余課生徒の修身學の授業の際に、聖書を輪讀してその講義を行つた。この余課といふのは余科とも書かれてゐるが、当時宣教師がバイブル・クラスとよんだもので、英學校の本科の外に上級者に神學や哲學を教授するものであり、後の神學部の源泉となるものである。

さて、デビスの聖書授業をたまたま目撃した横井課長は、そのことを次のように記してゐる。

南舎ノ一教場ニ至ル。教員シエト、デト、デビス西面シ生徒八名東面或ハ南北面シテ各椅子ニ坐シ書ヲ把リ教員ノ令ニ從ヒ輪次ニ之ヲ讀ム。其書ヲホーリイ、バイブルトス。輪讀畢ルノ後教員口ツカラ來世ノ事ヲ説キマホメツト宗ノ事等ヲ弁スルコト凡ソ

廿分時間ナリキ。然シテ後我ニ向ツテ謝シテ曰ク修身ノ課ヲ授クルニハ聖書ニ拠リ以テ少シク未來ノコトヲ摘説セザルヲ得ス。

教ニ此書ヲ用ユト(同志社視察之記、上、明治十二年五月二十八日)

この横井忠直課長の報告にはなんらの批判を加えていないが、六月に新島社長を府庁によび出して、同志社開学にあたって校内では一切聖書を教えないという榎村知事への誓約に違反するものであるといつて、始末書の提出を求めてきた。直ちに新島社長は榎村知事宛に弁明書を差出して、誓約書を提出した際に知事との紳士契約によって、聖書は学校内で教えないが、修身学に関する耶蘇の教誡は校内で教えても差支えないと考えると主張した。しかるに、この書付けは不十分であるとして知事から校長に下げ渡し書き直すことになった。そのため、新島社長は書き改めた弁明書を再び提出して受理されたが、これで問題は解決した訳ではなかった。

府学務課の調査の態度は、むしろ潜行的になった。「同志社景況記」(明治十二年六月二十四日)の探索者は前月の「視察記」の場合とは違った別人と考えられるが、デビスの修

身学に關連した聖書教授のことを、明治九年二月に新島社長と結社人(山本覚馬)の兩名が府庁に差出した誓約書に違背したと、その誓詞の一部を引用して激しく非難攻撃している。いま、その一節を引くと、左のごとくに記されている。

前月ノ視察記ニ述タル如ク其実ハ顯然ホーリイバイブルテフ聖書ヲ會説シ且書外ノ事ヲサハ疊々トシテ講説セリ。是豈不都合ノ甚キナラスヤ。之ヲ社長ニ詰レハ則チ曰ク我豈誓ニ背ンヤ。但当日ノ講説ハ正課ノ爲ノニ引用シタルナリ。諸君ノ該場へ臨マルルヤ正課ノ書即ホブキンス氏ノ修身学書既に畢リシニ生徒其書ノ論説ノ基礎トスル処ノ耶蘇ノ教誡ニ付テ質問アリシニ右教科書中ニ不足ノ分アリシカ故ニ止ムヲ得ス聖經中ヨリ耶蘇ノ語ヲ引用シテ答弁ニ及ヒタル而巳ト。嗚呼何ソ遁辭ノ甚キ。(中略)若シ果シテ正課ホブキンスノ書ニシテ耶蘇ノ語ハ引用ノミナラハ該場ノ書籍ハ悉クホブキンスノ書ナルベキニ教員生徒ノ俱ニ手ニスル処ノモノハ悉クホーリイバイブルニシテ一冊ノホブキンスノ書有ルコトナシ。況ンヤ卷ヲ掩フノ後モ尚ホ來世ノ事ヲ説キマ

ホメツト宗教以下諸派宗教ノ事ヲ弁スル凡ソ廿分時間ニシテ曾ツテ一語ノホブキンスニ説キ及ボス無キニ於テヤ。

この探索者の立場は、当時の学務課当局、さらに榎村知事のキリスト教に対する考えを反映するものであった。仏教僧の場合のように、破邪護法といったものではなく、キリスト教嫌いな、しかも、いささかの学問的理解を示そうともしない悪意すらも認められるであらう。

どうも、この根源は榎村知事にあつたように思われる。新島先生自身も榎村知事のキリスト教排撃には手を焼かれたようであつた。

そのことは、新島控帳に、

京都府知事榎村正直氏は切に我教の蔓延せらん事を恐れ随て我校を廃止せしめんと企たて百方手を尽し我輩の進路を絶たんことを計ら「れ」しを以止むことを得ず同氏在任中は會堂〔第二公会〕の建築を見合せ新知事北垣国道氏の來れるに逢ひ諸事自由任地主義なるを以て五月〔明治十四年〕より此會堂建築に取懸り九月を以て落成云々

とあることによつても、明白である。

榎村正直は長州出身で、木戸孝允の紹介で

新島要を知り、府顧問山本覚馬を紹介して、この兩人を接触させて同志社開校に援助を与えた。また一方では、楨村は京都府の殖産興業のために欧米文化の移入を計って、新文化建設に努めた京都府政の功労者であった。しかし、仏教側からの突きあげもあったが、楨村自身のキリスト教嫌いは何人も如何ともすることができなかつたのである。

### 明治十二年の理財情況

「同志社視察記」第四回（明治十二年十月）の英学校の部には、理財についての興味ある



楨村知事の肖像

記載があるので、採録しておこう。

○問フ社中毎月一切ノ出費平均高ハ凡ソ何程ナルヤ。曰ク社中出費ノ詳細ナルコトニ至リテハ一々御答出来難シ。別ニ理財委員アリテ森田久万人（本年夏期卒業生ノ一ニシテ現今教員ノ一員ナリ）ト云フ該委員ニ就テ其詳細ヲ了セラレヨ。

明治十二年六月余課第一回卒業生十五名のうち、山崎為徳、市原盛宏、森田久万人は、学校に残つて幹事を勤め、それぞれ教育、庶務、理財の事務を担当して新島校長を援助した。「視察記」第四回には、さらに次の如くに記されている。

○理財委員森田久万人ニ校中毎月一切ノ出費平均高ヲ問フ。曰ク内外教師ノ給料ヲ除キ每期（凡三ヶ月）生徒ノ授業料ヨリ納マル所ノ金平均凡ソ百貳拾円。之ヲ一ヶ月ニ分付スレハ凡ソ金四拾円ヲ得。之ヲ以テ門番小使の方等ノ給料並ニ其他ノ諸雜費ヲ弁スルナリ。内外教師ノ給料ハ社長之ヲ掌リ当校資本金ノ内ヨリ之ヲ支給ス。此資本金ナルモ

ノハ従来社長ノ所持金ヘ或ハ有志輩ヨリノ募金寄附金等ヲ加ヘ成ルモノニシテ其詳細ニ至リテハ一々之ヲ答フル能ハス。乞フ社長ヘ之ヲ質サレト。

○或曰、同志社一切ノ費用ハ米國宣教會社ヨリ悉皆之ヲ支給スト。故ニ教堂并ニ教師ノ居家及ヒ生徒ノ寄宿舎其他ノ建築費ヲ初メ臨時ノ出費等ニ至リテハ其要求ニ応シ彼社ヨリ之ヲ送ルト。果シテ然ラハ生徒一切ノ学資モ亦或ハ之ヨリ出スナラント。今該社一切費用ノ回テ支給スル所ヲ尋ヌルニ答弁曖昧其實際視察スル所ト大ニ協ハサルアルヲ以テスレハ此事立証言ニハ非ルヘキカ。

森田久万人のほか、新島先生の不在中校務を代理する市原盛宏、多才な教師として活動する山崎為徳も「視察之記」の随所に登場する。与えられたスペースでは、それらのことは次の機会にゆずらなければならぬ。

（本文の資料は外務省文書課記録によつた。）

（校友・京都市立美大教授）

写真説明 明治九年十一月入浴したフランス学事使節ギメに随行した画家エフ、レガメ（E. Legamey）席上即写の楨村正直知事肖像。京都市立美術大学蔵

## 薄倅の詩人・雲峰

### 手塚竜磨

#### 同志社人からも

#### 忘れられた明治の詩人

雲峰の名が出たときのこと、ある大学生は正しくは「ユンフォン」というべきだと注意してくれた。この大学生は、中国革命文学作品中の傑作とされている『紅岩』に出てくる革命家、許雲峰（シューユンフォン）を思い出していたようだ。私もこの作品を映画でみて知っていたが、大学生の注意を、決して知ったかぶりのおせっかいだとは思わなかった。明治の詩人に関心をよせる人ならともかく、いまどきの文学青年にはわからぬのもあたりまえである。この詩人が学び、卒業した同志社でさえ、そんな人がいたのかと首をか

しげているのではないかと邪推したくなる。雲峰については、校友の重久篤太郎君が本誌で紹介したことがある（第四号所載「雲峰と明治文学」参照）。だが、せっかくの論策も学内識者の目にはとまらなかつたようだ。分厚い『同志社九十年小史』にも、その名はついに見出せなかつた。重久君が同志社の広報誌に書いたのだから、それをとりあげないはずはなかるうと、もう一度、目を皿にして探してみた。すると、雲峰のペンネームではなく、磯貝由太郎という本名で出ているのを見つけた。たった一カ所だけである。明治二十六年の女学校専門科の学科受持教員表のなかにその名をみた。めずらしい資料だが、解説

はない。第三章「女子教育」の分担執筆者もおそらく、詩人雲峰であることに気づいていないように思う。残念なのは、「同志社に育った人々」のところにその名をみないことだ。文芸関係ではいつもながら蘇峰・蘆花一辺倒である。『国民の友』に作品をのせたというだけで、校友でもない国木田独歩を校友あつかいしているのはナンセンスである。文学史家の失笑をかかっている。『国民の友』の寄稿家なら、卒業生雲峰の名と作品をあげなければならぬ。それほど、いまの同志社人は磯貝雲峰について無知であり無関心である。

#### 伝説の石にさざまれた

#### 蘇峰の碑文

新島襄や湯浅半月とゆかり深い群馬県安中市の地つぎに松井田町がある。安中が近隣の町村を合併して市制をしたとき松井田も町域を拡張して残った町村の全部を吸収したので、安中市の成立後は、全国でもめずらしい一郡一町のマチになった。雲峰が生い立った碓氷郡九十九村（つくもむら）も松井田町となり、雲峰の母の実家で、雲峰が生れた郷原は安中市にはいった。旧中仙道と碓氷川に

沿って、いまの安中市と松井田町は長くのびているのだが、この一帯は同志社人にとっていわば心のふるさとである。安中には新島襄の両親の旧居があり、その近くには新島先生記念碑と湯浅半月詩碑がある。そして、松井田には磯貝雲峰碑がある。

松井田町国衙(こくが)の国道沿いのものと桑畑であった場所に、雲峰碑がたつたのは昭和十六年三月である。詩人としての雲峰ははやくからみとめられていた。山田美妙は明治二十四年に出した『青年唱歌集』の前がきで今は此道に尽くす人士もやうやく多し、温雅な雲峰子、端麗の残花子、一種飄逸の梅



磯貝雲峰 1865—1897

#### 花道人

といて、はやくも将来ある詩人として雲峰を戸川残花、中西梅花と共に挙げていた。その後の明治文学史家も、叙事詩に新しい領域を拓いた先駆者として雲峰を評価したが、死後は久しく忘れられていた。天折して遺稿が世に出なかつたのと、生前、労作が発表された女学雑誌、同志社文学その他が残りすくなかり、古書店の店頭から姿を消してしまつたからである。

雲峰を再発見して、建碑のきっかけを与えたのは詩人で英文学者の山宮允氏であった。東京府立高校(いまの東京都立大学)教授時代に明治の文学雑誌を手広く収集されたが、そのなかに女学雑誌があつた。雲峰の作品の大部分はこの雑誌に発表されていた。建碑の前年、山宮氏がラジオを通じておこなつた明治の新体詩についての連続講演が雲峰の遺族の一人の心をとらえた。オシ雲峰の話をきいてオイの海軍軍人が、建碑の念願を果すことになつた。七十九歳の蘇峰が雲峰のオイ、内田市太郎の依頼によって贈つた碑文はつぎのようである。

磯貝雲峰君ハ通称由太郎内田仁八郎ノ三男

群馬県碓氷郡九十九村ニ生レ後母氏ノ生家ヲ継キ磯貝氏ヲ称ス君幼ニシテ神童ノ名アリ明治十八年京都同志社ニ学ヒ同二十二年業ヲ卒ユ当時同志社ニハ桂園派ノ歌人池袋清風君在リテ清神直醇ノ歌風ヲ鼓吹ス君実ニ其ノ社中ノ重ナル一人トシテ才鋒尤モ露ハル而シテ短歌ヨリシテ更ニ叙情詩史等ノ新体長篇ニ進ム当時文壇ノ諸雜誌新聞概ネ君ノ寄稿ヲ歓迎セサルモノナシ明治二十八年英文学研究ノ目的ヲ以テ米國ニ遊学シ業半ニシテ病ヲ抱テ還リ明治三十年秋東京渋谷ノ仮寓ニ歿ス享年三十有二君資性温厚人ト争ハス物ト競ハス然レトモ其ノ詞源滾々湧クカ如ク当時ノ文壇ニ新旗幟ヲ翻シ新生面ヲ打開シ其績実ニ較著ナリ天若シ君ニ壽ヲ恵マハ其ノ造詣スルトコロ更ニ大ナルモノアリシナラン此ニ君ノ賢甥海軍大佐内田市太郎君予ニ向テ其ノ碑ニ誌センコトヲ要ム予欣然自カラ知ル所ノ梗概ヲ掲ケテ之ニ応ス

昭和十六年一月

この碑文をきざんだ石にはまん中にくぼみがある。小橋橋良平編著『九十九史考』(二九・五 九十九教育委員会刊)によれば、この石

は亀石とよばれた伝説の石である。松井田城の庭にあって朝夕城主の目を楽しませていたが、落城とともに主に別れて雑草に埋れていたのを、いく年かのおち、九十九郷に土着して百姓になった家臣が城山から運んできて、旅人をなぐさめていたという。この亀石が雲峰碑につかわれたのだから、石もところを得て、満足しているだろうと故老は語っているという。碑の裏面には雲峰のつぎの歌がきざまれている。これを雲峰の歌碑とよんでいる人もある。

早蕨を折りし昔よしのばれて  
恋しくなりぬ故里の山

### 十年ぶりの再探訪

雲峰碑をはじめたずねたのは十年前である。信越本線松井田駅からバスで二十分ぐらいだが、回数がすくない上に途中にちよっとした坂があったりして歩くのは楽でなく、安中へ立寄ってからだと、どうしても二日かかりになる。不便なためであろうか、バスによる文学散歩の上州コースも、その頃はここへは寄っていないかった。上州といえはカラッ風とカカア天下をすぐ連想するが、関東では随

一の風光にめぐまれたところで、文学者にゆかり深い土地が多い。文学散歩の上州コースは館林(田山花袋)をかわきりに、前橋(萩原朔太郎)、伊香保(徳富蘆花)、榛名湖(竹久夢二)をへて、時には磯部鈿泉(いま安中市)に大手次次の碑を巡視するけれどオリジナリティな新体詩発祥の地、いわば詩壇のメッカといってもよい安中と松井田にある半月、雲峰の二人の創成期の詩人を忘れてはならない。

このときは、詩碑をカメラに収め、碑文を写しとただけだが、町役場でみせてもらった『九十九史考』を、そのとき不在で会えなかった松井田の知人から借りることができ、周辺の歴史と地誌について新知識をうることができた。入手できないでいた山宮允氏の『書物と著者』と『日本現代詩大系』の第一巻も古書展で探し出した。『書物と著者』(二四・六 吾妻書房刊)には安中行記一半月、雲峰、新島三氏の遺跡を訪らふりが出ている。戦争たけなわの十八年六月、乗物の不便をしのび「先覚の遺跡を訪なふの素懐を果された筆者には、同志社人のひとりとして心から感謝しなければならぬが、この一文はまた雲峰の人と業績を知る唯一の手がかりであり、雲峰

碑探訪の案内書でもあった。『日本現代詩大系』第一巻(二六・一一 河出書房刊)には、女学雑誌の付録に発表された雲峰の代表作、長文の叙事詩「知盛卿」と同志社文学および中京文学に載せた小詩二篇が出ている。

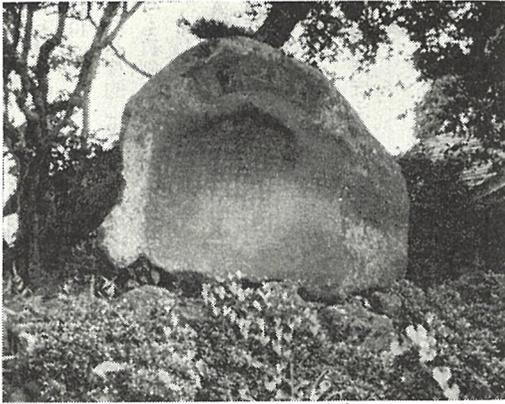
現代詩大系は、日夏歌之助、山宮允、矢野峰人ほか二人の詩人の編集になるものである。矢野峰人博士は大西祝の女婿であり、戦後しばらく文学部教授として同志社大学英文科の再建に尽されたというつながりはあったけれど、編集者はすべて同志社の卒業者ではなかった。しかし、詩人および詩の研究者としての高い立場から、忘れられた雲峰の業績を紹介して、一連の作品をのせ再評価によりどころを与えられた。この二つの書物はさきにあげた『九十九史考』と共に自宅での研究にどれほど役立ったか知れない。

再度の探訪は、遺族にあつて、墓のありかをつきとめるなど雲峰研究に新しい分野を開拓するためであったが、二人の同行者の協力がなかったら、これほどの成果はえられなかったであろう。女学雑誌の主筆巖本善治夫妻(夫人嘉志子は『小公子』の名訳者若松賤子のペンネームで知られる)の記念会巖本会の

主宰者磯崎嘉治氏と明治文獻勤務の大野みち代さんが同行した。磯崎氏は地元の人たちとの連絡を分担し、大野さんは戦後英文科で学んだ人だからいわば私の直系の後輩であるが、写真や書簡の複写に腕をふるった。

### 生家に同志社時代の書簡をみる

十年ぶりでクルマを走らせた松井田からの国道はすっかり舗装され、雲峰碑のある小高



松井田町にある雲峰碑

い植込みの柵はブロックづくりになっていて、風致がうすれた思いである。近くにある松井田町立第六小学校をたずねる。九月には三、四日も早いにもう新学期の授業がはじまっていた。正午すぎに神宮克夫校長と神戸貞一教諭に案内されて、雲峰碑の隣りにある雲峰の生家に当主内田豪一（ひでいち）さんをたずねた。生家といっても、正しくは生れた家ではなく、幼少時代をすごした家である。雲峰の父仁八郎の頃には商家だったが、いまは塩と雑貨をあきなっているだけで農業が主である。建坪六十坪の総二階は養蚕室にあてられ、裏庭には牛舎とニワトリ小屋があった。家の様子は雲峰の幼少時代とあまり変わっていないという。

琉球おもてを敷きつめた大部屋で額にはあった雲峰の写真と書簡の束をひろげた。写真は山宮氏の著書にあるのと同じもの、書簡は十四通あったが、一通をのぞき全部が同志社時代に父の仁八郎にあてたものである。差出人の住所書きは、「西京今出川同志社」「京都同志社」などのほか「同志社学院普通学生」というのもあった。その頃はまた内田姓を名のり、几帳面に内田由太郎拝としたためであ

る。郷里のあて名は、群馬県上野国碓氷郡下増田村というのが多い。九十九村字下増田となったのはのちのことである。父仁八郎も几帳面な性格らしく配達をうけた時刻を封筒にかきつけている。それをみると、五月九日に出したものは十二日の午後四時頃には受信されていて、明治二十年前後の郵便事情は、いまの遅配ぶりよりは増しであったようだ。

書簡の内容はほとんどが送金の催促である。五人兄弟の四人目だったが、秀才だというので京都へ遊学させたものの手許不如意のときもあつたに相違ない。雲峰も同志社へいってのんびりやっていた訳ではない。蘆花の「黒い眼と茶色の目」には、上州の人、片貝芳太郎という名前が随所に出てくる。敬二（蘆花）とは懇意で、寮の二階の自分の部屋にいるより階下の片貝の部屋にいられることが多かったと書いている。説明にもあるように、その頃の同志社には学資の乏しい学生のため時間の鐘ならし、教室の掃除、門番などのアルバイトがあった。雲峰は三つの門の開閉と夜間の受付を受持っていたので、蘆花よりも広い階下の部屋を与えられていた。それで学資は相当かせげたはずだが、家父への送金督

## COLLEGE SONG

Doshisha College Song は、明治四一年の作で、作者は当時、近江八幡で自給伝道をしていた二十六歳の青年 William M. Yorick である。同氏は後年門人等と共に「近江兄弟社」を結社して湖国に自給伝道を続けたが、一九六四年五月死去した。作詞の構想について作者は「同志社の性格はその名の通り One Part-Poem です。そこに詩想の根柢をおいて書きつづけました。そして第三節までは神のため、同志社のため、祖国のためとうたったが、最後の第四節において世界同胞のためとなりました。」と語っている。詩の大意はつぎの通りである。

一、同志社とは一つの目的の下に集ったものという意味である。一つの目的とは神と祖国とに仕えて生きた良心を手腕に運用する人物の育成である。母校よ、あなたの息子たちは、葡萄の木の一つの枝をはるが如く、世界何処の地に散らうとも、胸の底に、母校の教えを常に忘れることはない。

二、われわれは同志社へ広き教養を得、真の目的の尊さを学ぶために来た。母校は、高い目的をもって、神と同志社と祖国とを守ることを教えたので、われわれは、強固な心をもって将来にむかえる。

三、戦雲濃き時は、一百人のいくさびとがほこをもつて立つ。しかしわれわれは、平和の長い年月の間に祖国の名声を挙げる。母校よ、あなたの息子たちは、聖き信につらぬくであらう。

四、祖国という域をこえて、地球は一であることをわれわれは学んだ。自己愛をこえて人類を愛し、これに奉仕することの尊さを学んだ。

母校よ、あなたの息子たちは聖き生涯を生きんとし、年へると共に神と同志社と人類愛とに奉仕するであらう。

促は頻繁だった。どの手紙にもその理由が綿綿とつづられているが、新学期までにととのえねばならぬ辞書や洋書の種類、その金額などを具体的に書いてあるものもあって催促ぶりも真剣だった。同志社在学中の生活は相当くるしかったことがわかる。あとの一通は、雲峰が卒業後上京して明治女学校につとめ、かたわら女学雑誌の編集を手伝っていた当時のもので、麴町から家父にあて、金の督促ではなく、仕事で忙しいと得意な気持をほめかけたほえましい内容のものに変わっている。

内田家には、このほか幼少時代の写真と同志社英学校の卒業証書が残っていたそうだがこの日探したときは見当らなかつた。卒業証書は内田か磯貝か知りたかつた。同志社側の記録によると証書には磯貝となっていた。明治女学校時代の書簡には磯貝姓になっている。蘆花は改姓後の姓を「片貝」ともじり在学中の描写にもちいている。この改姓は、その頃一般にとられた徴兵のがれのための措置だったといわれるから卒業前のことで

あった。

内田家には同志社在学時代や東京時代だけでなく、同志社女学校および金城女学校の教員時代の手紙もあったと思われるが、残っていない。社会人になってから、一度も出していないとは考えられない。また山宮氏が訪問のとき示されたという雲峰所蔵の日本の古典文学書や英仏語学書はみられなかつた。

(次号へつづく)  
(校友・部政史料館勤務)